2017年度　自己点検・評価【文学研究科】

C票

＜目標、行動計画＞進捗確認シート

提出日：2018年2月22日

2021年度に向けた教育研究目標

責任者	文学研究科委員長	作成部局	文学研究科

【A票：教育研究目標1】

（タイトル）
課程博士育成の促進と学位取得率の安定化

（狙い内容）
審査制度を持つ学協会誌への論文投稿や国内外で開催される学会・シンポジウムにおける発表に結びつくような教育指導体制の充実化を図るとともに、現在各領域が提示している「博士学位論文提出要件」についての検討も不断に行いながら、優れた研究成果を携えた博士学位取得者を安定的かつ継続的に輩出していくことをめざす。

1．教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿（目標）

後期課程における収容定員に対する充足率がほぼ現状を維持する中にあって、博士学位取得率に関してみれば現状を上回る指数が出ている。

2．達成度評価

評価指標	博士学位の取得率を上げる。	評価尺度	Ａ：博士学位取得率が基準比20%アップ Ｂ：博士学位取得率が基準比15%アップ Ｃ：博士学位取得率が基準比10%アップ Ｄ：博士学位取得率基準の設定

3．年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点		D 評価基準の検討	D 評価基準の設定	C		C	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の目標値	評価尺度：A～D	D	D	実績	C				
	見込・実績・目標（値又は状況）	評価基準の検討	評価基準の設定		博士学位取得率が基準比10%アップ				

【2017年度の進捗状況について】

学位取得者数は、2015年度が7名であったのに対して、2016年度は11名と増加しているが、他方2014年の16名から見るとほぼ横ばいである。従って、今後もこれまで以上に指導体制を強化し、取得率の目標達成を目指すと同時に、質の向上に向けてより一層の取り組みを行っていくことが必要である。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？　→　はい・いいえ

＜評価専門委員・第三者評価結果＞　2017年12月22日公示

- 行動計画1と2の両方について、具体的にどういった準備を行ったのか、実直な記述を期待したい。（A）
- 11月末の学位論文提出状況を見なければならないが、2017年度は基準値の設定（2015＝7、2016＝11）を踏まえ、推移を見守る必要がある。（B）
- 行動計画①,②のさらなる進展が望まれます。（D）
- 博士学位取得率の向上と質の向上を目指した取り組みがなされており、大変評価できます。（E）
- 「問題点の洗い出し」「改善方策の構築」とは、どのような問題点が洗い出され、どのような方策が構築したのかについて、進捗状況に書き加えられることで、適切な検証と改善、評価につながります。
- 学位取得率が上がったことは、結果だけ見れば良かったと言えるのかもしれません。しかし、行動計画がいずれも「準備」の段階であることからすれば、目標と行動計画の因果関係は検証しておく必要があるでしょう。（G）
- 順調に進展しているものと思います。（H）
- 2017年度進捗状況に記述されているとおり、博士学位の取得率向上の目標達成と合わせて質の確保・向上についても取組みを進めていただくことを期待しています。（J）

【A票：教育研究目標2】

（タイトル）
研究支援体制のさらなる充実化

（狙い内容）
文学研究科が2008年度よりスタートさせた文学研究科内「研究支援制度」の見直しと点検を行い、この制度がより多くの院生に向かって開かれるものとなり、そのことによって院生の研究活動がより活発化していくことをめざす。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿（目標）

「研究支援制度」の補助金を支給する対象となる研究種目（項目）や申請方法を見直すことにより、多くの院生にとってこの制度が活用しやすくなるとともに、外部との競合的関係の中で自身の研究能力や専門的技能を伸長させていく機会や場が増えることも含めて、研究活動が多様化したものとなっていく。

2. 達成度評価

評価指標	研究支援体制の広範で柔軟な運用をめざす。	評価尺度	A：運用 B：構築完了 C：準備段階 D：検討段階

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点		C 課題の明確化	C 準備中	A		A	A	A	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度： A～D	C	C	実績	B				
	見込・ 実績・ 目標 （値又は 状況）	課題の明確化	準備中		施策の実行				

【2017年度の進捗状況について】

学位取得の問題は、全対象者に対する比率や取得者の数のみで考えられる問題ではなく、その後の進路の問題も含め、後期課程入学者の質を確保すると同時に、指導体制の充実、研究の多角的な支援等も含め、設定した目標を到達するための施策を実行しているところである。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？ → はい・いいえ

＜評価専門委員・第三者評価結果＞ 2017年12月22日公示

- 行動計画1については数値目標が適切である。（A）
- 進捗状況に遅れがあると思われます。2017年度は施策の実施の年であり、支援体制の充実化がどう実現したのかを早急に明確化する必要があります。（B）
- 順調に進展しています。（D）
- 適切なアプローチであり、評価できます。（F）
- 進捗状況に記述されているとおり、研究支援以外の施策について、行動計画に設定するなり、進捗状況に記述するなりして、適切に現状を把握することが望まれます。（G）
- 評価指標として、補助金受給者の割合とありますが、確かに受給者数を増やせばよいというものでもなく、質の保証と並行させることを考慮するなら、さらなる工夫が望まれます。（H）
- 行動計画①で、前年度の具体的な数字の明記が望まれます。（I）

【A票：教育研究目標3】

（タイトル）
教員・院生間の学術交流の活性化と各領域の知の結集化

（狙い内容）
大学院指導教員と大学院生とが一丸となって高い学識を持った集団に育っていくために、教員・院生が一堂に会する研究発表会をスタートさせ軌道に乗せていくとともに、前期課程の授業においては各領域の知を結集して現代の学問的課題に応え得る「文学研究科特殊講義」の見直しと定着化を図る。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿（目標）

教員と院生とによる合同研究発表会が年2回定期的に実施され、あわせて「文学研究科特殊講義」が春・秋学期に1講ずつ開講されることによって、文学研究科の教員・院生間での学術的交流が促進され、各々の学知の広がりと研究意欲の高まりについての相互関心が一層増していく。

2. 達成度評価

評価指標	合同研究発表会の実現 「文学研究科特殊講義」の実質的運用	評価尺度	A：構築完了・運用 B：試行段階 C：検討・準備段階 D：

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点		C 準備中	C 準備中	C		C	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度： A～D	C	C	実績	C				
	見込・ 実績・ 目標 （値又は 状況）	準備中	準備中		検討・準備段階				

【2017年度の進捗状況について】

教員と大学院生が一堂に会する研究発表会については、一部の領域ではすでに実施され始めている。文学研究科特殊講義に関しては、講義内容、担当者などについて検討中である。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？ → （はい）・ いいえ

＜評価専門委員・第三者評価結果＞ 2017年12月22日公示

- 順調です。（A）
- 順調に進捗しているものと思われますが、研究会がいくつの領域で実施されているのか明確化する必要があります。（B）
- 順調に進展しています。（D）
- 研究発表会が部分的であるにせよ、実施されていることは評価できます。（E）
- 順調に進展しているものと思います。（H）
- 合同研究会の取組みを通じて、一層の研究科の活性化が進むことを期待しています。（J）